



丹羽文雄文学全集 第十九卷

怒濤 かしまの情

丹羽文雄文学全集 第十九卷

怒濤・かしまの情

一九七六年二月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二番二号 郵便番号 一〇二二  
電話 東京〇三〇九四五一一二二（大代表）振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません

©丹羽文雄 一九七六年 Printed in Japan

(文1)



目  
次

人間図……………229

憎悪……………207

継子と顕良……………185

かしまの情……………49

怒濤……………7

創作ノート	417
さまざまの嘘	381
気紛れの線	357
檻樓の匂い	321
欲の果て	279
こおろぎ	259

装幀 辻村益朗

(写真・一九四八年、武蔵野市西窪の家にて、  
左より妻綾子、長女桂子、文雄、長男直樹)

丹羽文雄文学全集 第19卷

怒濤・かしまの情





怒

濤



一

ここの温泉は動脈硬化に効くという。軽い気違いなら癒るといだが、癒るような気違いなら気違いではあるまい。わたしのは血脈神経が弱まっていると医者はいう。動脈硬化も弱まった一種だろうが、医者は血脈の神経がひどく疲れているとしかいわなかった。どちらでもよろしい。わたしは日に三度お湯にはいる。そのため子供のように腹がへる。わたしが己のからだを意識におくようになったのは卒倒してからである。ご飯を十分にたべてから酒をのんだのがいけなかった。二、三杯の酒が胃にしみていくと急に喉までしゃっくりの大きなのが突きあげてきた。息がつまっていた。ううッと仕舞いには声も出なくなつた。喉をひっかいていたまでは覚えていたが、あとは知らない。目を開いた時には枕許に寝せた医者が坐っていた。血圧がなくなつていた。注射三本で、

「狭心症の軽い発作ですよ。絶対安静を要します」

医者の診断には頷けなかった。医者をかえてみると、  
「心臓肥大症です」  
それにも合点がいかなかった。帝大の分院で診てもらつたが、

「血脈神経がひどく疲れています。そのため血圧がなくなるので、狭心症と誤診されるのでしょう」

反証のもちこみよのないこの診断には、わたしは黙つた。いずれにしても卒倒したことはたしかなので、以後は注意をするだけである。養生といつても今後このからだを二十年三十年もたすという意味ではない。六十一歳の生涯のこのこりの日を含めて不自然な状態で苦しまないようにならうと決心した。現在では己の気分と張り合うことはからだがいうことをきかない。気ばかりあせつて疲れるだけである。そのため誰の言葉もきき入れたく思う。この海辺の温泉をすすめてくれたのは東の細君の園子だが、鳴海屋のおかみの杉枝であろうとわたしの助手の佐伯であろうと、彼等の忠告はうけ入れれる。それが正しい態度なら、今後は一同のいうとおりにしてやろうと思う。

ここに到着してからすでに三日が経っている。海が近すぎるので波の音を一つももらさず聞いている。満潮のときには岸の岩にぶつかる音が屋台骨をゆすぶる。この宿など建てから十五年目だというが、よくよく頑丈にできている。人間の構造では、がまんができない。海岸べりの街燈

は半分消えているが、絶えず波にゆすぶられているので、電球がゆるんでいるのか、切れてしまっているのであらう。わたしは不眠症になった。ことに就寝時間は潮のみちてくる時間である。何百米も一列になった波が一斉に岸をめぐって押しよせてくる。白馬をおどらす時には、めぐれこんだ波頭の上をそれがつつつと駆足で走っていくようであり、ばたんと唐紙を倒すような音を立てて汀にくだける。そのまま泡立ち、岸に押しよせる。ばたんと音がするのと同時に風圧がどんと宿の兩戸にぶつかる。わたしは寝床の上に坐り頭をかかえて、見失ってしまった睡眠を呼びかえす術も知らない。昼間お湯から上って、とろとろと眠るだけである。こうした状態が一週間もつづけば治療どころではない。卒倒の発作も考えねばならない。がいつからかあまり眠らないですむ人間になっているので睡れない時間にうるたえはしない。しかし温泉宿の時のながさには困る。宿全体が眠りにおちて、夜明けの五時がくるまでの永さは、ひたすら死の来るのを待つ病人のように捉えどころのない空虚を感じさせる。仕事をあまりしなくなつてからのわたしは、時間に対して耐えるという気心を失っている。以前は仕事場に坐りこんで夢中になっていたので時間の足に気が向かなかつたが、いったんその足に気がつくのと、時間とは思っていたよりもろのろと歩いているものと、終夜枕を膝にたて、その上で肘をついて時間の足を眺

めている。そういう時には波の音も単調にひびく。老人ともなれば時間の観念を失うものか、大抵は辛抱づよい。一時間坐つていられるところなら三時間は無神経に坐っている。わたしにはできない芸当だ。わたしの精神の中には空虚な休息があたえられない。ボクサーがひとり練習をしているときは、身がまえて絶えず防禦と攻撃に左右の腕をふるい跳躍しているように、精神の中でたえず防禦と攻撃の態度をとっているものがある。しかし肝心の力がない。力がないために、かえって気ばかりあせるのかも知れない。三階の廊下の柱にかかっている古びた時計はいつも駆足で時間を知らせた。あつと思う間にちんちんと急いで鳴つてしまふ。しかし聞きそこねたと思つた時には殆んど正確に時間は聞いているものだ。時間というものに対する永い間の習慣が、初めの一つ二つをうつ時にはうっかりしていても聞き終つてしまふと、たしかに九つうったような気がする。しらべてみるとやはり九時である。ということは誰にも覚えのあることだ。それにしても宿の柱時計がなぜこのように急ぎ足で知らせるのか訳がわからない。何かなし皮肉な奴である。

わたしは明日のことは考えない。何もすることがないからだ。すべてのものに対して無関心になっている。肉体への関心も周囲のものによけいな迷惑をかけたくないからである。と言うことはわたしの場合、すべてのことに関心を

もちすぎているということと相隔たることいくばくもない。が昔のわたしはこんな調子ではなかった。以前のわたしはと考えてみると無邪気なおかしさだけを覚える。結構それで生甲斐を感じていたのだが――。わたしは時たま陶画もやるが陶工が本職であり、初代景長の赤津窯の手焙り火鉢のかけを直したり、青磁の壺のひび割れを完全にこまかししたり、景德鎮の人形の首を巧みについでみたり、脚の欠けた陶馬に現形と寸分ちがわなない脚をくつつけたり山西省沢州の絵高麗浸唐子壺のかけを直したりする言わば陶工の修繕屋である。こまかし屋である。いんちき陶工である。こまかし屋の職能に殺気だった生甲斐を感じていた時の観察点に立って振りかえると――、わたしの陶工仲間では別物扱いをされ、常に怖れられていた。狷介、傲慢、変人、へそ曲り、油断のならぬ男、小股ばかり擲いたがる男とされていた。今日帝室技芸員とか何々会の審査員級の五、六人はわたしの才能を骨身にしみて知っている。わたしには一片の社会的地位もないが、彼等はどこにいるか判らないわたしの存在が常に気にかかるのである。彼等のあるもの出世作はわたしが作った。その頃は名声より金がほしかった。わたしに金をはらい彼はいまの社会的地位を築き上げているのだという解釈は、永い間わたしの慰めになっていた。わたしの傑作は彼の名前によって歴史にのこる筈である。名前などはどうでもよいものだ。名前がなければその作

の価値が定まらないという俗見は、京都の名画が大抵山菜と永徳作にされているのと同じに滑稽ことである。が作った本人のままで何某作の花瓶を見せつけられたりすると、以前のわたしは盲千人の世の中を思いきり嗤ってやった。嗤うことに意義を感じた。金で買われた何々某の名声の空虚さを誇張して面白がっていたものであるが、そういう自分の他愛なきが無邪気すぎて、ひとことのおかしい。わたしは名士ではない。がその名にふさわしい種々の傑作はのこしている。わたしの名がついていないだけだ。おそらく永久にわたしの名前は浮かび上らないであろう。いまわたしはひとりぼっちで、海辺の宿で不眠症に悩まされているが、自業自得とはこんなものか。わたしは六十一年かかって自分の特殊性をこなごなに砕いてきたにすぎなかった。勿論だれの罪でもない。が特殊な才能をもちながら、それだけの仕事をしていながら世間からは何も認められずに誰も知らない日かげに落ちて腐っていく木の葉のように死んでいく自分の一生がうれしくない。わたしから最後の氣力をとりあげようとするのは、何ものか。

二十何枚かの雨戸を繰る音を聞いてから、ぐっすりと睡った。疲れきって眠るのだからよく睡っていたにちがいない。女中がはいってきた。

「いらっしやらないのかと思いましたが。随分電話鳴らしましたのに……。東京からお電話です」

室内電話が鳴っていたのにも気が付かなかった。

「どうもすみません、お手数かけて」

と詫びながら折角の睡眠をさまたげた電話に肚を立てた。

「もしもし、曾根ですが、曾根郁次郎ですが」

「朝っぱらからすみませんね」

長距離電話ははつきりと聞きとれた。鳴海屋の杉枝である。

「なにね、あなたのかえりを待ってからでもよかったんですがね、急にきまったものだから……。鳴海屋が売れましたよ」

鳴海屋が売れる？ 何の意味だろう。鳴海屋は旅館ではないか。

「いつまでもはやらない旅館をやっていることありませんからね。内々買手をさがしていたんですよ。いい買手がつかましてね。思い切って手放すことにしましたよ」

わたしの三十年来の住居であり、仕事場であり、助手の佐伯も同居している鳴海屋が売れたということに、わたしはながく驚かなかった。

「鳴海屋ももう昔のものですよ。買手は少し手を入れて、新時代向きの高級アパートにするつもりなんだそうですがね」

「すると、わたし達はどうなるのかね」

「みんなに出ていって貰うつもりですよ」

わたしを驚かしたのは杉枝の非人情な仕打ではなく、そう言われても動揺しない己の、何とかなるだろうという横着さである。無関心、無欲とは、自分で自分に見限りをつけることがあるが、わたしのはちがう。

「それじゃ東さん達は？」

「あの夫婦は東のやつてる化粧品屋の二階に移るといってますがね。あなたの身の振り方ですよ。あなたも三十年間うちのお客さんですからね、行くあてのないあなたをおぼり出すような真似はしませんよ。あなたの身柄はたしかにわたしが引きうけましたよ。わたしもこれからは茶のみ友達もほしい年頃ですからね」

「なるほど茶のみ友達としてね。ところが、佐伯はどうなるのかね。わたしの仕事はどうなるのかね」

「あんな仕事もうやめてしまいなさいよ。小遣い稼ぎなら、もっと他に気のきいたのがいくらもあるでしょうが」

まったく鳴海屋のおかみにも認められていないわたしの仕事であった。

「佐伯さんの身のふり方は、あなたが東京にかえってから、ゆっくり相談することにしませう」

電線を伝わるせいか杉枝の声は六十三歳には思えなかった。四十女のような声量があった。

わたしは再び牀についた。何かさし当って考えなければ

ならない気持であるが、何を考えたらいいか。考えることはこれまででたくさんし尽している。むりに思考力をかき集める。佐伯もいなくなる、わたしには金がない、名声も地位もない、子供も家内もない、親戚もないことを考えうかべたが、やはり死ぬのはいやだった。牀に腹衝いになり、枕に頭を埋めて、時間をもてあましていただけでなく、わたし自身をこの世の中で持てあましていたのに気がついた。いったいわたしは六十一年間に何をしてきたかというのか。わたしとはいったい何ものか。この世の中に生をうけた理由がはたしてあったらうか。所在なさにわたしは自分自身を知ろうと努めた……。

二一

曾根郁次郎、六十一歳、清水市江尻の生れであるが、清水を訪ねなくなつてから三十年の余になる。両親が生きていて、伯父叔母の達者だった頃には親戚という觀念もあつたが、年長者がそれぞれ死に、姪や甥との交渉がなくなる自分の身辺には一人も身寄りのものがないという気持ちに慣れた。生れた清水市江尻も遠い昔の記憶であり、だれかの故郷といった感じである。自分がそこで生れたことは忘れてゐる。わたしの不幸は故郷を忘れたことから始まると思つたところで、それほど気障には聞えない。東京という植民地風な都会が作りだした流れものの心情をもつてい

る。わたしには友達がない。時たま窯を焼かせてくれる北郷胤次は松泉焼の大家だが、特にわたしの友人名簿の名譽にもならない。彼はわたしの才能を知っている。信頼もしているが怖れてもいる。北郷級の二、三人はわたしの能力を知っているが、秘密をつかまれているので、わたしの名前を故意に抹殺している。何しろわたしの存在は不名誉な、油断のならない、天分豊かだが、根から俗人、商売人であり、むしろ有害な人物という印象を与えている。わたしは傑作も作つたが、安皿に絵も描いた。わたしの作品に堂々と何某作と銘を入れた。二つに割れた青華四君子の菓子鉢をいかにも疵物でないように直して高価に売りつけた。新聞の匿名批評で買取されて、何某の作を絶賛した。金を借りて返さなかつた。現在今日美術骨董店のお抱え陶工として、工芸品の破損の修理を生活のもとにしている。わたしはよくそのからだで精がつづくと言われるほど勤勉家である。どんなにかさまものを持ち込まれても、相手が人間の場合には決して芸術的な良心をもち出さない。これは大切な心得である。努力がある。だれかれに拘らず良心的に振舞つている人は不純に汚される恐怖はない。不純な仕事を引きうけながらなお良心を曇らせないということは更に忍耐がある。これは重要なことだ。絶えず泥中に溺れながらわたしは心の真珠を失わなかつた。教養のおかげである。わたしは仕事の上では凶暴な敵となるが、不断は正



直な、やさしい人間である。誰に向つてもやさしい心を使う。謙譲<sup>けんじやう</sup>なのだ。仕事以外のところでは誰にも恨まれたり嫌われたことがない。わたしのいくところには和やかな風が吹く。これは幸せである。

「曾根さんて、芝居にいれあげて零落してしまつたお金持の老人つて感じですかね。どんなに落ちぶれても、生れつきのお品のよさは決してなくなりませんわね」

園子がそう言うように六十一歳だが、五十歳といつても世間には通る。ごましお頭は自分の気に入っている。わたしはひどく小柄であり、齒はまだ丈夫である。若い頃は牛乳で顔をあらつたことがあるだろうと言われるほど肌理はつやつやして、女のようになめらかだ。自分でも時々女に生れてくるのが本当だつたと疑う。骨格も女性的である。首も細い。こまかく神経のゆきとどいた身綺麗さを保っているが、おしゃれには神経をつかう。子供にも親しまれる。ただある時の眼付だけが印象を裏切つて、底気味悪く冷酷<sup>たいく</sup>に光る。この目は自分ひとりの時に使うのである。わたしはこの目を内部の目と称している。その目は時に人間でない生物が仕事部屋にはいつてくる時にはじろつと投げつける。相手は猫である。仕事場の障子が開いているような時、その前の廊下を親猫が先ず通る。だれにも叱られない安心なわが家といった四足で、のそりのそりと歩いていくのをこの目で睨みつける。親猫は歩きながらちらりと

わたしの方を見る。すぎがあれば、仕事部屋にはいつて来そうな気配である。自分によく似た目を猫の目に発見する。怯んではならないのだ。猫はそのまま行きすぎる。続いて一匹、また一匹、あとからあとへつづいて猫が通りすぎる。全部で十八匹だが、杉枝の飼猫である。鳴海屋では家族と猫は同列である。三、四匹までは恐い顔をして睨んでいるわたしも、十匹を越える頃には負けてしまう。仔猫といつてもどれも相当の大人であり、親猫にまねて、ろくにわたしの方をふり向かない。一匹々々つながつて廊下を歩く猫はたぐりよせられる緞帳<sup>だんぢやう</sup>のようにつづいて消えていく。わたしはいつも現実ばなれた気持になる。猫も一、二匹なら可愛いが、十八匹となると獣の集団であり、可愛いなどと人間の心情では及びもつかぬ。杉枝は子供のようにはまんべんなく世話をやいていた。幸い鳴海屋では東も園子も猫は嫌いでない。わたしは好きではない。猫は杉枝のうしろについてまわる。鰯を煮て、食卓で一匹ずつに食べさせている。

「おや、また一匹足りないね」

親猫が台所の柱一本に爪をたてることを仔猫に教えたものらしい。足で障子をあげることを教えたのも、親猫である。時節柄魚が高くなつたと愚痴<sup>ぐち</sup>を言い言い、杉枝は小魚に気をくばっていた。

猫にさえ邪魔されなかつたならばわたしの日課は順調に